

本人・家族の声から見えた 認知症施策の方向性

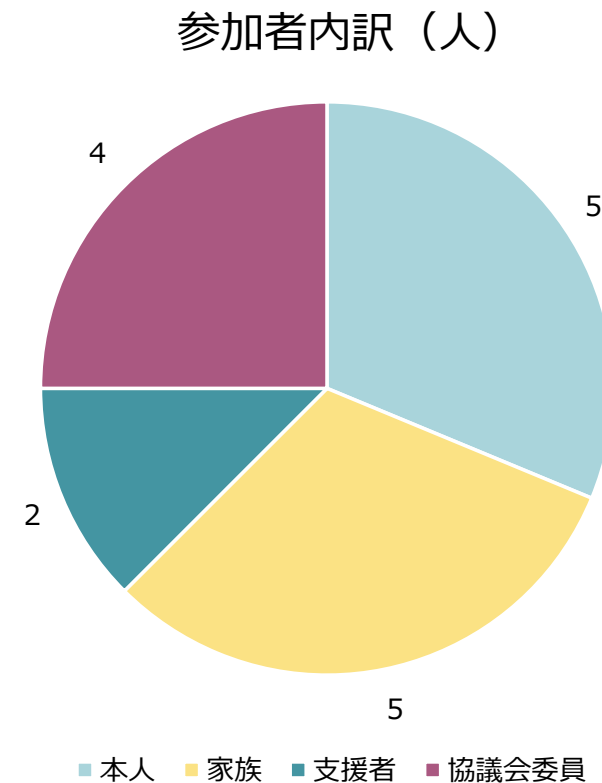
令和 8 年度第 1 回千葉県認知症対策推進作業部会
開催結果報告

作業部会の位置付け 開催の意義

認知症基本法の理念に基づく本人参画

- ・ 本人、家族等の声を直接聴取
- ・ 単なる困りごとの収集ではなく、
施策形成への参画

本人・家族・支援者等 22 名が参加



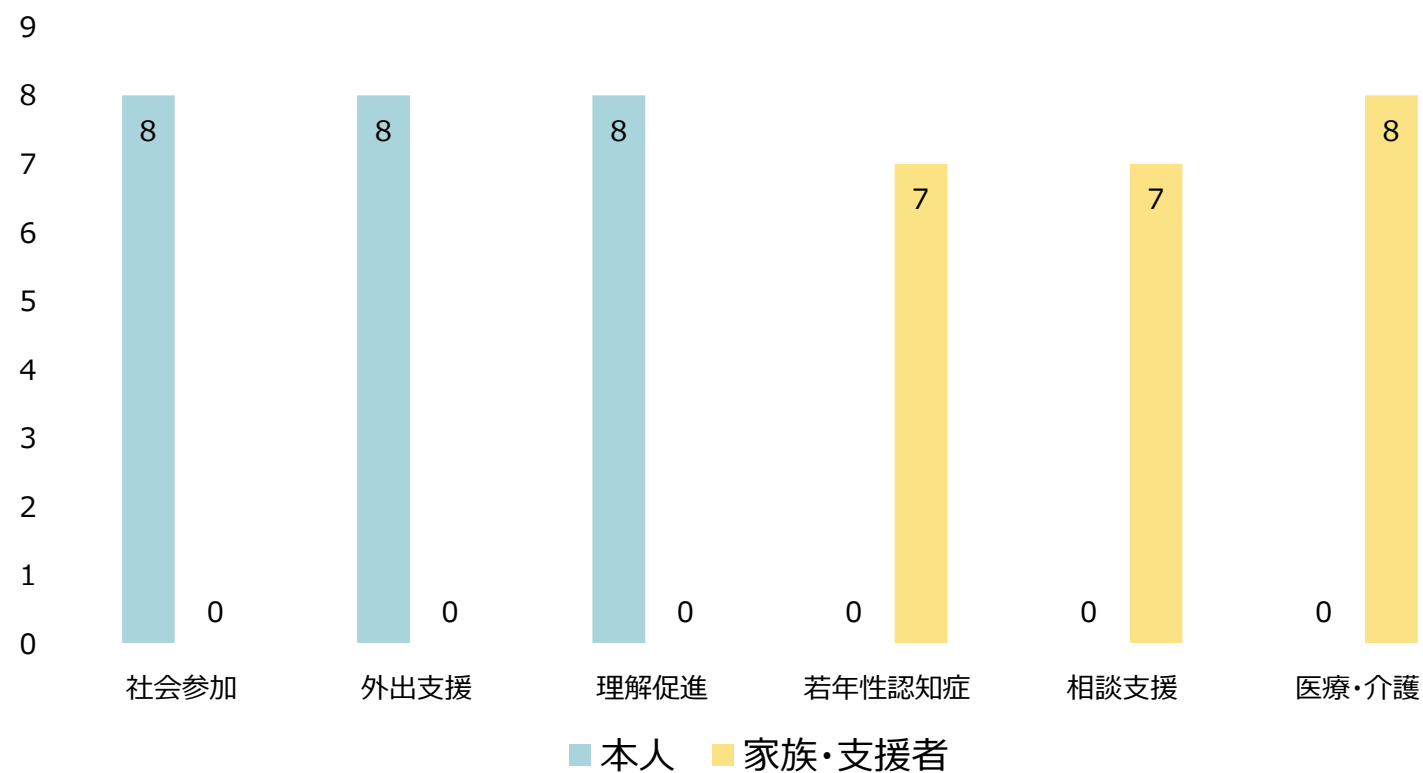
意見集約①

主だった発言 46 件を分類

大分類	小分類
社会参加	本人活動、居場所、仲間づくり、 地域参加、役割・生きがい
外出支援	同行支援、移動支援、買い物支援、公共交通
理解促進	偏見、色眼鏡、認知症理解、普及啓発
若年性認知症	就労、退職、若年性支援、 コーディネーター、制度利用
相談支援	相談先、情報不足、縦割り行政、 地域包括支援センター、支援導線
医療・介護	診断、専門医療、デイサービス、ケアマネ、 リハビリ、薬物療法

意見集約②

大分類を数値化
～本人、御家族・支援者の立場別に見た意見～



意見分析結果

～意見から見えた5つのテーマ～

社会参加

外出支援

理解促進

若年性支援

相談
医療・介護

■ 本人御意見
■ 家族・支援者御意見

テーマ① 社会参加

「家族以外とも出かけたい」

「もっと社会に出る
機会がほしい」

「本人同士で話せる場が必要」

～認知症の人本人の声～

本人が求めているのは

“支援されること” ではなく

“地域の中で役割を持ち続けること”

テーマ② 外出・同行支援

「家族しか付き合えないのが
悲しい」

- 現状 ▶ 家族が付き添えないと外出が困難
- ・ 家族依存型の外出支援
 - ・ 移動手段、買い物環境への不安
 - ・ 社会参加を支える仕組みが不足

- 課題 ▶ 活動機会が制限されてしまう

～認知症の人本人の声～

テーマ③ 認知症への理解促進

「認知症という
一括りで見ないでほしい」

「色眼鏡で見られるのが
苦しい」

認知症への知識の普及から
“接し方” “共生社会の実現” への転換
「新しい認知症観」と正しい理解の普及

～認知症の人本人の声～

テーマ④ 若年性認知症支援

「相談先がわからなかった」

「支援コーディネーターに
辿り着くまでが大変」

相談先不明 ▶ たらい回し ▶ 支援到達まで長期間

- ・ コーディネーターへのアクセスに課題
- ・ 就労、生活支援情報の提供不足

～家族・支援者の声～

テーマ⑤ 相談・医療・介護

「専門医に繋がるまで
時間がかかった」

「たらい回しになった」

早期診断だけでなく、診断後支援へのニーズが高い

- ・ 専門医療へのアクセスの差
- ・ 行政の縦割り体制による相談負担
- ・ 本人の能力を活かす支援が必要

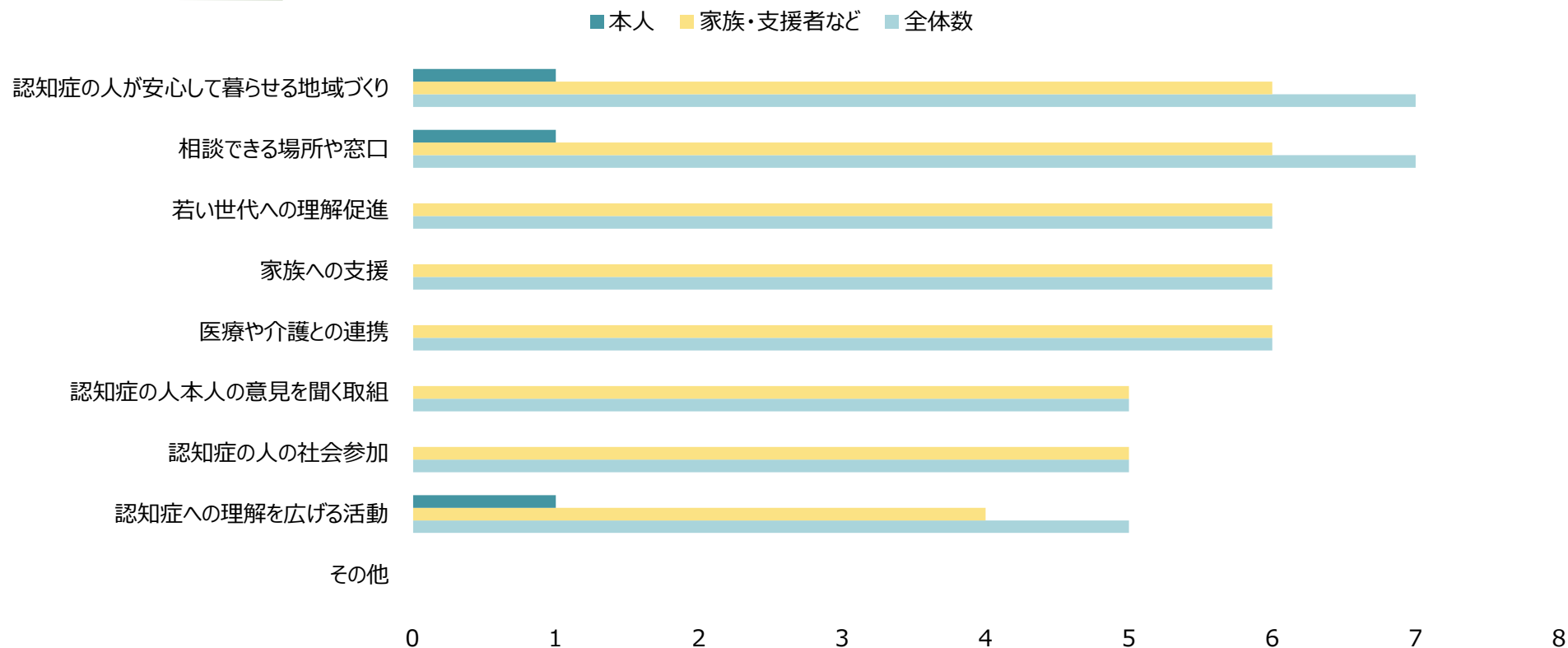
～家族・支援者の声～

課題の整理

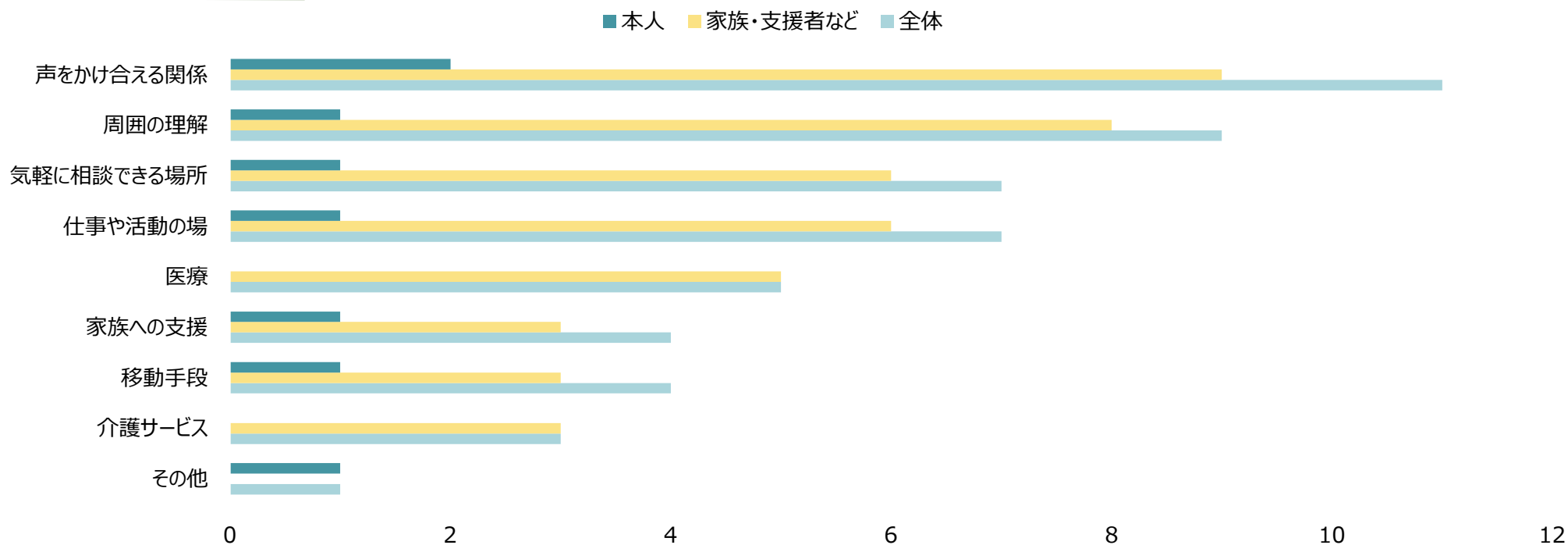
No	課題	現状	課題に対する解決策（案）
1	本人の社会参加	本人の活動機会の不足 今年度作業部会を初開催	本人ミーティングの開催促進 チームオレンジ活動促進 作業部会の継続開催 居場所づくり・就労支援の促進
2	外出・同行支援	市町村の施策を確認中	持続可能な事業の検討
3	認知症への理解促進	ちばオレンジ大使を委嘱	ちばオレンジ大使の活動促進支援 認知症サポーターのステップアップ
4	若年性認知症支援	若年性支援コーディネーターの人員不足 相談窓口の周知不足	若年性認知症支援コーディネーター の拡充・周知強化
5	相談・医療・介護	コールセンター運営 若年性支援コーディネーター配置 認知症疾患医療センター設置	関係課・関係機関との連携強化

作業部会 実施後アンケート結果（抜粋）

Q10 千葉県の認知症施策で もっと力を入れてほしいと思うもの（複数回答）



Q11 認知症がある人が地域で暮らしていくために 大切だと思うこと（複数回答）



その他意見

- ・ 認知症も当たり前として、周りも構えず、普通に付き合えると良い。

Q14 認知症に関することで、千葉県に伝えたいこと

- 窓口担当者が、認知症や若年性認知症の方が
 どういふことに対して困っているかを知って欲しい。
- 市町村に統一性を持たせた認知症の相談窓口があれば。
- 地域づくり⇒人と人との関係づくりが大事
- 当事者の声を認知症だけでなく、色々なところで拾ってほしい。
 （話す機会、話しやすい環境づくりをしてほしい。）

（※原文ママ）

まとめ

- 求められているのは介護サービス拡充だけではない
- 地域とのつながりを維持する支援が重要
- 本人参画を継続して施策を改善する
- 認知症になっても安心して暮らせる地域共生社会を目指す

